学生の高齢者のイメージに関する研究（第1報）

†水沼国男[1)]，寺沢宗典[3)]，高橋則人[2)]，鶴　浩幸[2)]，松本　勅[2)]

[1)] 明治鍼灸大学　東洋医学基礎教室
[2)] 明治鍼灸大学　老年鍼灸医学教室
[3)] 特別養護老人ホーム　はぎの里

要旨：学校の授業で介護体験をする機会が増加してきているが，一方で実習での態度など色々な問題が指摘されている．

本学は4年次に特別養護老人ホームなどの施設において老年ケア実習を行っているが，実習により高齢者に対する考え方やイメージが変わったと述べる者も少なくない．高齢者に対する考え方やイメージなどが教育によってどのように変化するのかを検討するため，その第一段階として高齢者に対して持っているイメージ等を調査した．

方法は，明治鍼灸大学の学生計470名を対象に，独自に作成したアンケート用紙を用いて，高齢者に対するイメージ等を調査した．有効回答数は，417名（88.7%）であった．

高齢者をイメージする年齢は，60歳以上，あるいは70歳以上を合わせると9割を占めた．施設訪問の経験がある者は，3割から4割であり，また，介護等の経験者は，4割であった．高齢者への鍼灸治療に関して興味がある者が4割近くみられた．高齢者へのイメージは，頑固，体が弱っている，話が合わない，知識が豊富，優しいなど一般の学生と同様の傾向がみられた．介護の経験がある者でも，実習に入るのに積極的な者と抵抗を感じる者があり，高齢者を対象とする実習への導入に当たって，意識づけが不可欠であることが分かった．

Ⅰ．はじめに

日本は，世界に類をみないほどの早さで高齢化が進み，高齢者数は，平成12年には2187万人，高齢者率は17.2%と6人に1人が65才以上の高齢者となった．三世代家族の減少，夫婦世帯や一人暮らし世帯の増加がみられるように，高齢者を含む家族の小規模化が進行している[1)]．また，これまでに保険・医療・福祉の制度を見直して，介護を必要とする人のために必要なサービスを総合的に提供し，社会全体で支える仕組みとしての「介護保険制度」が平成12年4月より施行されるなど，高齢者を取り巻く環境は大きく変化している[2)]．

平成10年度より，介護等体験特例法によって小・中学校の教員免許の取得に際し，介護体験等による高齢者や障害を持つ人との交流や介護体験が義務づけられた．さらに，中学・高校・大学の授業やボランティアにより介護体験をする機会が増えている．しかし一方で，実習態度の悪さや実習に臨む心構えの不足などの様々な問題が施設などから指摘されているのも現状である[3),4)]．

明治鍼灸大学では，平成7年度より4年次に特別養護老人ホーム及びケアハウスにおいて老年ケア実習（介護実習・鍼灸治療実習）を行っている．これらの実習により，「高齢者に対するイメージが変わった」「高齢者に接する経験ができて良かった」と述べる学生も少なくない．

そこで今回我々は，学生の高齢者に対する考え方やイメージの現状およびそれが教育によりどのように変化するかを検討するために，高齢者のイメージについて学年別に調査を実施した．

Ⅱ．対象及び方法

対象は，明治鍼灸大学鍼灸学部の平成12年度，4学年　計470名（男277名，女193名）とした．調査は，4年生は平成12年4月の老年ケア実習のオリエンテーション時，3年生は4月の老年鍼灸学実習講義開始時，2年生は7月の前期終了時，1年生は12月の講義終了時に，質問紙によるアンケート方

平成15年4月9日受付，平成15年9月24日受理
Key Words：意識調査 Opinion poll，高齢者イメージ Images of the elderly，高齢者ケア Elderly-people care，鍼灸治療 Acupuncture and moxibustion treatment，大学生 University student
†連絡先：〒629-0392 京都府船井郡日吉町保野田ヒノ谷6　明治鍼灸大学　東洋医学基礎教室
Tel: 0771-72-1181　Fax: 0771-72-0326　e-mail:k_mizunuma@muom.meiji-u.ac.jp

式によって行った．

調査項目は，高齢者のイメージ（２項目），介護・介助経験（５項目），介護保険関係（２項目），特別養護老人ホーム等の高齢者施設への訪問経験（３項目），高齢者への鍼灸治療関係（２項目）などの18項目である．回答方法は，高齢者のイメージは記述式とし，他の項目は選択法としたが，選択肢のうち「その他」の内容については記述式とした．

高齢者に対するイメージについては，イメージ数や優先順位については特に制限を与えず文章で自由に記載させた．イメージの調査結果の分析は，学生が記述した高齢者のイメージを倉鋪ら[5]の方法に従って「身体機能」「精神機能」「社会的存在」「全体像を描いたイメージ」の大きく4つに分けた．さらに前の4つのカテゴリーを小カテゴリーに分けた．すなわち「身体機能」は，「外観」，「身体の衰え」および「病気に関すること」に，「精神機能」は，「性格・心理的特徴」と「知的特徴」に，「社会的存在」は，「生活者としての視点」，「人生の価値や生きがい」，「ライフサイクル」，「全体像を形容詞で」および「自分との関わり」の小カテゴリーに分類し，分析にあたって文章中よりカテゴリーに合わせて単語を抽出した．

Ⅲ．結　果

有効回答数は，417名（88.7%）であった．

1）高齢者のイメージ等について

(1) 高齢者をイメージする年齢

1年から3年は，表1に示すように60歳以上とイメージする学生が全体の43.7%で，70歳以上が46.3%であった．なお，学年別にみると1，2年生は60歳以上がもっとも多く，3年生は70歳以上が多く，学年によって異なる傾向を示した．

表1　高齢者をイメージする年齢

	50歳以上	60歳以上	70歳以上	80歳以上	90歳以上	100歳以上	その他
3　年	2(2.0)	33(33.3)	53(53.6)	6(6.1)	2(2.0)	3(3.0)	0(0.0)
2　年	4(3.6)	52(46.9)	47(42.3)	6(5.4)	0(0.0)	2(1.8)	0(0.0)
1　年	2(2.0)	51(51.0)	44(44.0)	2(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.0)
合　計	8(2.6)	136(43.9)	144(46.5)	14(4.5)	2(0.6)	5(1.6)	1(0.3)

各学年の高齢者をイメージする年齢別人数と（%）を示す．有効回答者数は，1年生101名，2年生111名，3年生は99名であった

(2) 高齢者のイメージ

高齢者のイメージを記述した学生は，表2に示すように合計325人であった．「精神機能」に関してが延べ161人，ついで「身体機能」が114人，「社会的存在」が102人，「全体像を描いたイメージ」が51人であった．

学生があげた項目では「精神機能」が最も多く，その中でも知的特徴の「物知り」が27人，「知恵がある・知恵袋」が14人と多かった．また，性格・心理的側面でも「やさしい」「穏やか」などのプラスイメージがあげられたが，反面，「頑固」「寂しがり」「ぼけている」「何度も同じことを言う」などのマイナスイメージも少なくなかった．次に「身体機能」に関するイメージでは，外観では「弱い・弱々しい」「年をとっている人」が多く，また，身体の衰えに関しては「動作がゆっくり」「体の衰え」「耳が遠い」が，病気に関しては「病気がある」が多く，マイナスイメージの項目が多かった．

また，「社会的存在としてのイメージ」については，「仕事」「日課」「経済的」「趣味」の数は少ないが，「人生の価値・生きがい」では，「人生経験・経験豊富」「人生の先輩」などプラスイメージが多く，「ライフサイクル」では，「死が近い」「戦争経験」などをイメージする学生がいた．

「全体像を描いたイメージ」は，全体像を形容詞でイメージすると「元気」「かわいい」のプラスイメージが各9人ずつみられたが，「さびしい」「孤独」「一人暮らし」「不潔」などのマイナスイメージを持っている学生も合わせて18人みられた．全体像を形容詞で描いたイメージの項目数は，マイナスイメージの方を持ちやすい傾向がみられた．「自分との関わり」では，「なりたくない」と考えている学生もみられた．

学生のイメージの全体的傾向としては，「精神機能」・「社会的存在」ではプラスとマイナスのイメージの両方があるが，プラスイメージの方が多く，身体機能ではプラスの項目はほとんどなくマイナスイメージが圧倒的に多かった．

2）高齢者に接した経験

高齢者に接したことがある学生は，図1aに示

表2　カテゴリー別イメージ

カテゴリー		項　　目	延人数
身体機能	外観	弱い・弱々しい	28
		年をとっている人	14
		腰が曲がっている	6
		よぼよぼ	4
		白髪	1
		細い	1
		重い	1
		計（a）	55
	身体の衰え	動作がゆっくり	13
		身体の衰え	12
		耳が遠い	8
		足腰が弱い	5
		身体の不自由	5
		しんどそう	4
		危なっかしい	2
		計(b)	49
	病気に関する	病気がある	6
		病気がち	2
		病院通い	2
		計(c)	10
		合計(a+b+c)	114
精神機能	性格・心理的特徴	頑固	22
		やさしい	16
		寂しがりや	10
		穏やか	8
		わがまま	6
		ほがらか	5
		気むずかしい	3
		しつこい	3
		人に頼る	2
		マイペース	1
		厳しい	1
		精神的に強い	1
		謙虚	1
		気分屋	1
		計(d)	80
	知的特徴	物知り	27
		ぼけている・ぼけ老人	11
		話好き	9
		昔話がすき	8
		知恵がある・知恵袋	14
		会話がうまくとれない	7
		同じことを何度も言う	4
		賢い	1
		計(e)	81
		合計(d+e)	161

カテゴリー			項　　目	延人数
社会的存在	生活者としての視点	仕　事	働き者	2
			働かなくてもよい	1
		日　課	早寝早起き	1
		経済的	金持ち	3
			年金生活	1
		趣　味	ゲートボール	1
		その他	手助けを必要とす	11
			孫をかわいがる	1
			一人暮らし	4
			自由	1
			暇	1
			計（f）	27
		人生の価値・生き甲斐	人生経験・経験豊か	30
			人生の先輩	22
			日本を築いた人	5
			人生の達人	3
			人の歴史の重み	1
			社会的弱者	1
			生き甲斐がない	1
			計(g)	63
		ライフサイクル	戦争経験	6
			死が近い	4
			長寿	2
			計(h)	12
			合計(f+g+h)	102
全体像を描いたイメージ		全体像を形容詞で	かわいい	9
			さびしい	9
			元気	9
			孤独	3
			大きい子供	2
			不潔	2
			こわい	1
			不安定	1
			計（i）	36
		自分との関わり	尊敬する	4
			なりたくない	3
			祖父・祖母	2
			いずれはなるもの	2
			焦らずに見守る	1
			尊敬できるのか	1
			未知	1
			身近な問題	1
			計(j)	15
			合計(i+j)	51

記述した学生の総数は325人で，「精神機能」に関してが延べ161人，「身体機能」に関してが延べ114人，「社会的存在」に関してが延べ102人，「全体像を描いたイメージ」に関してが延べ51人であった（重複有り）．

すように「常に接している（いた）」が，1年生では，38.4％，2年生は，38.6％，4年生は，37.7％と4割近くあり，3年生は，45.9％と半数近く占めた．反対に，「全く接したことがない」学生はほとんどいないが，「あまり接したことがない」学生は，各学年ともに約3割にみられた．

次に，接した時にどのように感じたかでは，図1bに示すように「非常に有意義であった」は2割前後であったが，4年生では高い傾向がみられた．また，「多少良いことをしたような気分になった」と答えた学生は3割ほどで，反対に「非常に苦痛と感じていた」のは，1割未満であった．

さらに，今後については，図1cに示すように「今後，高齢者と積極的に接していきたい」という学生は約4割で，「仕事等で必要があれば」という学生は約6割近くあった．一方で，「できれば接したくない」と考えている学生もわずかではあるが存在した．また，できれば接したくない理由は，「高齢者との接し方がわからない」「会話が成り立たない（相手の話がよくわからない）」「高齢者と接するのが怖い」などがあげられた．

3）介護経験・体験について

介護・介助の経験等では，表3に示すように痴呆高齢者と接したことのある学生は，全体でみると35.9％であった．3年生は，27.3％で低いが　1，2，4年生は，約4割が経験を有していた．寝たきりの人と接しことのある学生は，1年から3年まで

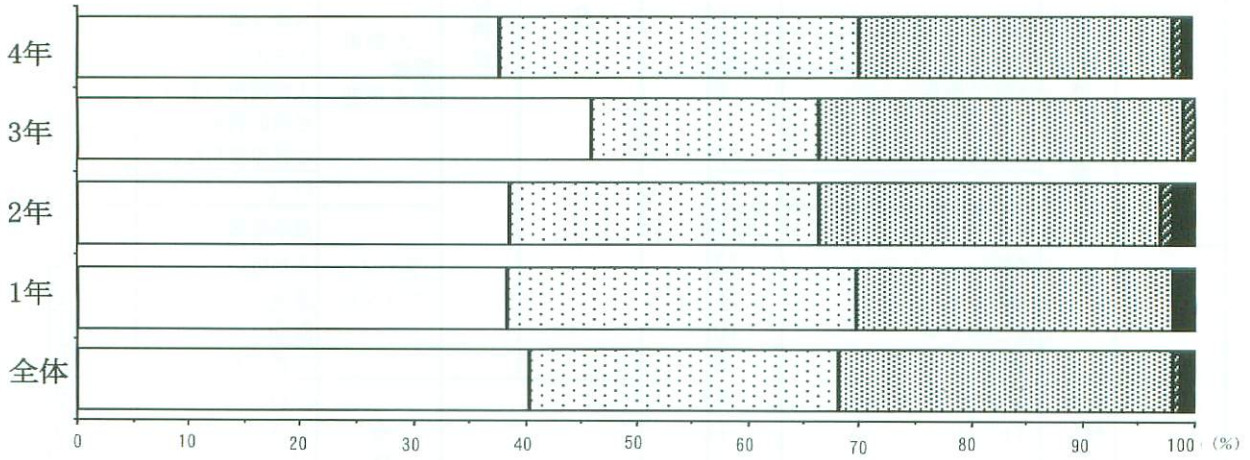

図1a　これまでに高齢者と接した経験者

各学年の有効回答者は、1年99名、2年101名、3年98名、4年106名であった

□常に接してる　□時々、接してる　▨あまり接したことがない　▨全く接したことがない　■その他

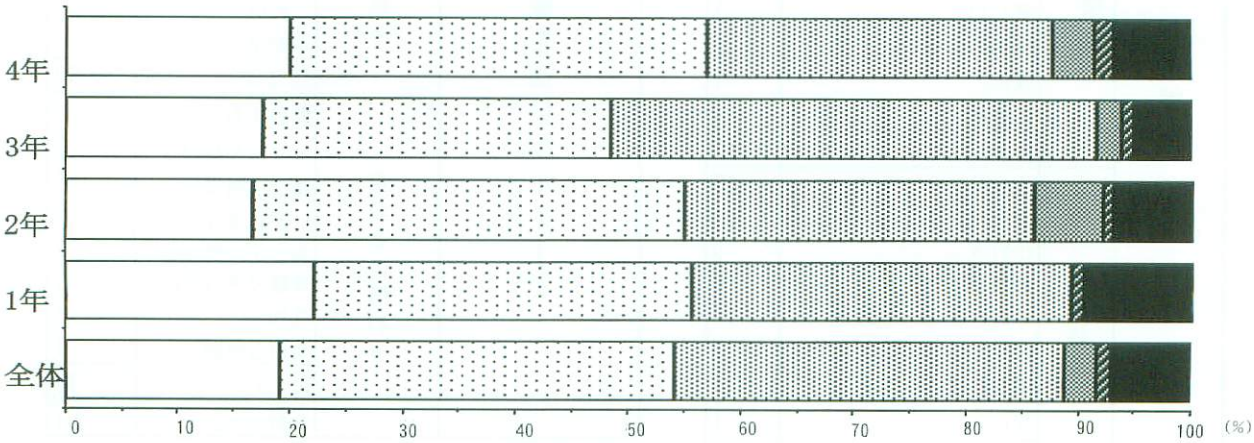

図1b　高齢者に接しての感想

各学年の有効回答者は、1年生95名、2年生102名、3年生97名、4年生105名であった。

□ 非常に有意義であった　□ 多少良いことをしたような気分になった　▨ 何も思わなかった

▨非常に苦痛で二度と接したくないと思った　▨接したことがないからわからない　■その他

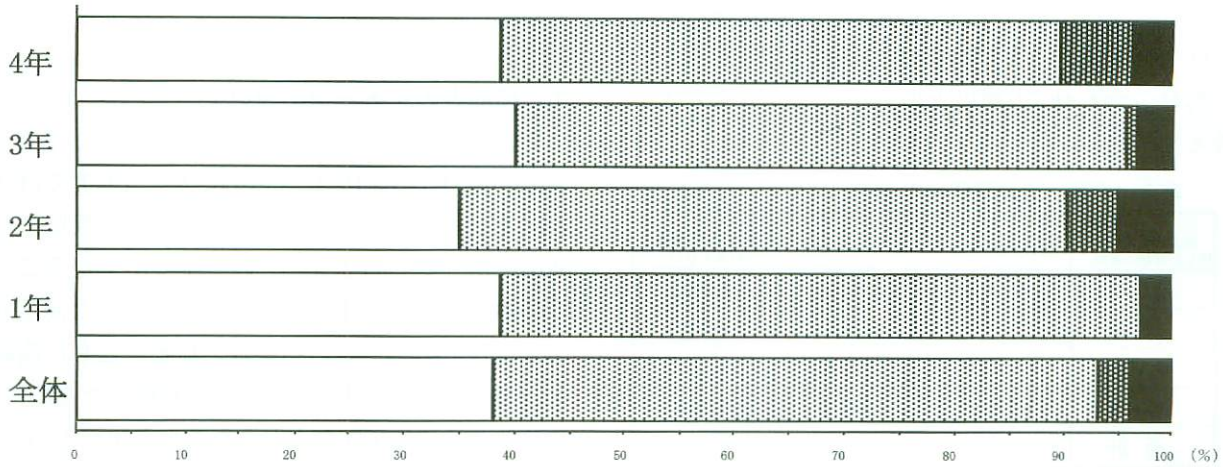

図1c　今後、高齢者との接触の希望

各学年の有効回答者数は、1年生101名、2年生103名、3年生95名、4年生106名であった。

□積極的に接していきたい　▤仕事等で必要があれば接していく　▨できれば接したくない　■その他

は約4割であった．4年生は，約半数と多かった．車椅子を押した経験では，1～3年生は約半数が，4年生は約6割が経験を有していた．

また，介護・介助の体験希望については，表4に示すように入浴介助を「是非してみたい」「一度ぐらいならしてみたい」を合わせると1，2年生で約6割，3，4年生は共に7割と多かった．食事介助では，してみたいものがさらに多かった．しかし，「できることなら行いたくない」と考えている学生も1，2年生で2～3割前後，3，4年生で約1割存在した．また，入浴介助と食事介助では，入浴介助をできれば行いたくないと考えている学生の方が多かった．

4）特別養護老人ホーム等への訪問経験について

特別養護老人ホーム等の施設への訪問経験の割合を図2に示す．学年が高いほど訪問経験が低い傾向にあり，1年～3年では6割が，4年生では7割が経験がないことがわかった（図2a）．訪問経験がある者の感想では，「是非，今後も訪問したい」と考えている学生は，1年と4年は2割台で少なく，2年は36％，3年は42％と多かった．また，「有意義であったが，自らすすんで行きたいとは思わない」と思っている学生が，25％～53％みられた．また，「二度と訪れたくない」と考えている学生も，1割以下であるが存在した（図2b）．さらに，訪問経験がない者の訪問の希望では，「是非訪問したい」と考えている学生が1，3年生は2割強存在し，2年生は30％，4年生34％と3割以上存在した．一方，「授業等で必要があれば訪問したい」と考えている学生が約半数存在した．また，「すすんで訪問したくない」と考えている学生が，1年，3年，4年生は1割，2年生はさらに多く16％にみられた（図2c）．

5）介護福祉制度等について

介護福祉制度に関する結果を図3に示す．制度を知っているかでは「興味があり詳しく知っている」学生は5％以下で少ないが，「新聞，テレビ等で名前などを見たことがある」学生は，1年生，2年生ともに約半数であるが，3年生では6割弱，4年生で7割弱と学年が上がるにつれて増加した．残りのほとんどは「名前ぐらいは聞いたことがある」と回答した（図3a）．

また，介護支援専門員（ケアマネージャー）についての認識では，「興味があり詳しく知っている」学生はほとんどないが，「新聞，テレビ等で見たことがあり，少しは知っている」学生は，1・2年生では3割であるが，3年生と4年生は，4割前後と多かった．また，「名前ぐらいは聞いたことがある」学生は，4割前後あった．一方，「全く知らない」学生は，2年，3年および4年生は，10％台であったが，1年生は約3割と多かった（図3b）．

6）施設での鍼灸治療の導入に関して

施設での鍼灸治療の導入ついては，図4に示すように「是非取り入れるべき，できれば就職したい」と考える学生が25％前後あり，また，「就職

先としては考えられないが，施設での鍼灸を取り入れるべき」と考えている学生が64～72％存在しており，合わせて9割以上の者が導入すべきだと考えていた．

表3　介護・介助経験者の割合

痴呆の人と接した経験の有無	接した事がある	接した事がない	その人が、痴呆かわからない
4　年	43(40.6)	56(52.8)	7(6.6)
3　年	27(27.3)	66(66.7)	6(6.0)
2　年	37(36.3)	57(55.9)	8(7.8)
1　年	40(38.8)	55(53.4)	8(7.8)
合　計	147(35.9)	234(57.1)	29(7.0)

寝たきりの人と接した経験の有無	接した事がある	接した事がない
4　年	52(49.1)	54(50.9)
3　年	37(37.4)	62(62.6)
2　年	41(40.6)	60(59.4)
1　年	40(38.5)	64(61.5)
合　計	170(41.5)	240(58.5)

車いすを押した経験の有無	経験がある	経験がない
4　年	59(55.7)	47(44.3)
3　年	49(49.5)	50(50.5)
2　年	53(52.0)	49(48.0)
1　年	51(49.5)	52(50.5)
合　計	212(51.7)	198(48.3)

介護・介助経験者者の人数と（%）を表に示す。
有効回答数は、痴呆の人と接した経験については、1年生103名、2年生102名、3年生99名、4年生106名であった。寝たきりの人に接した経験については、1年生104名、2年生101名、3年生99名、4年生106名であった。車椅子を押した経験は、1年生103名、2年生102名、3年生99名、4年生106名であった。

表4　介護・介助体験の希望

入浴介助の体験希望	是非、行いたい	一度ぐらい経験したい	できるなら行いたくない	その他
4　年	19(18.0)	57(54.3))	22(21.0)	7(6.7)
3　年	10(10.1)	66(66.7)	20(20.2)	3(3.0)
2　年	12(12.0)	49(49.0)	34(34.0)	5(5.0)
1　年	11(11.0)	47(47.0	28(28.0)	14(14.0)
合　計	52(12.9)	219(54.2)	104(25.7)	29(7.2)

食事介助の体験希望	是非、行いたい	一度ぐらい経験したい	できるなら行いたくない	その他
4　年	24(25.0)	62(64.6)	3(3.1)	7(7.3)
3　年	19(19.4)	64(65.3)	12(12.2)	3(3.1)
2　年	18(17.8)	47(46.5)	29(28.7)	7(7.0)
1　年	15(15.2)	49(49.5)	21(21.2)	14(14.1)
合　計	76(19.3)	222(56.3)	65(16.5)	31(7.9)

介護・介助体験希望者の人数と（%）を表に示す。
有効回答数は、入浴介助を行いたいかについては、1年生100名、2年生100名、3年生99名、4年生105名、食事介助を行いたいかについては、1年生99名　2年生101名、3年生98名、4年生96名であった。

Ⅳ．考　察

学生の高齢者に対する考え方やイメージが，教育によりどのように変化するかを検討するために，まず高齢者に対して持っているイメージ等の調査を実施した．

1）高齢者のイメージについて

今回の調査で高齢者と感じる年齢は，1，2年生では60歳以上が約半数を占めたが，3年生では60歳以上は約3割と少なく，70歳以上が半数以上で高かった．これは吉尾ら[6]の，学年が上がるごとに高齢者と感じる年齢が上がるとの報告と同じ傾向を示している．この結果は，加齢とともに高齢者と接する機会が増え，高齢者を理解したために，高齢者と感じる年齢が上がったことを示している．中には，50歳，80歳，90歳あるいは100歳以上と答えた学生もいたが，全体では60歳，70歳以上と答えた学生が合計で9割以上あり，看護学生や他の大学生等の調査ともほぼ一致していた[7],[8]．

学生の高齢者のイメージをカテゴリー別に分けて検討した結果，「身体機能」は，身体の衰えをイメージするものが多かったが，外観の項目は少なかった．外観よりも衰えをイメージするものが多いのは，授業などで身体の加齢による変化について講義を受けているためであると考えられる．しかし，具体的な病気に関することは少なく「病気がある」「病気がち」「病院通い」があったのみであった．

「精神機能」のカテゴリーの中で，性格・心理的特徴では，「やさしい」「穏やか」といったプラスイメージがあるのに対し「頑固」「わがまま」「寂しがり」等のマイナスイメージもあった．知的特徴では，「物知り」「知恵がある・知恵袋」「話好き」などのプラスイメージの傾向が強いが，「ぼけている，ぼけ老人」とマイナスイメージも若干みられた．このことから，身体的なイメージはマイナスイメージが強く，精神的なイメージはややプラスイメージが強い傾向を示したことが分かった．これらは，大谷ら[9]の，大学生は頑固などの保守性や活動性に対してはネガティブなイメージを持っているが，高齢者の知恵や経験に対しては一応ポジティブなイメージを持っているとの報告と同様な結果であった．

また，全体的なイメージでは，「なりたくない」「尊敬できるのか」「自分の祖父母とは違う」等の意見もあり，今後，高齢者に対する理解を深めるような講義の内容や指導を検討しなければならないと考える．

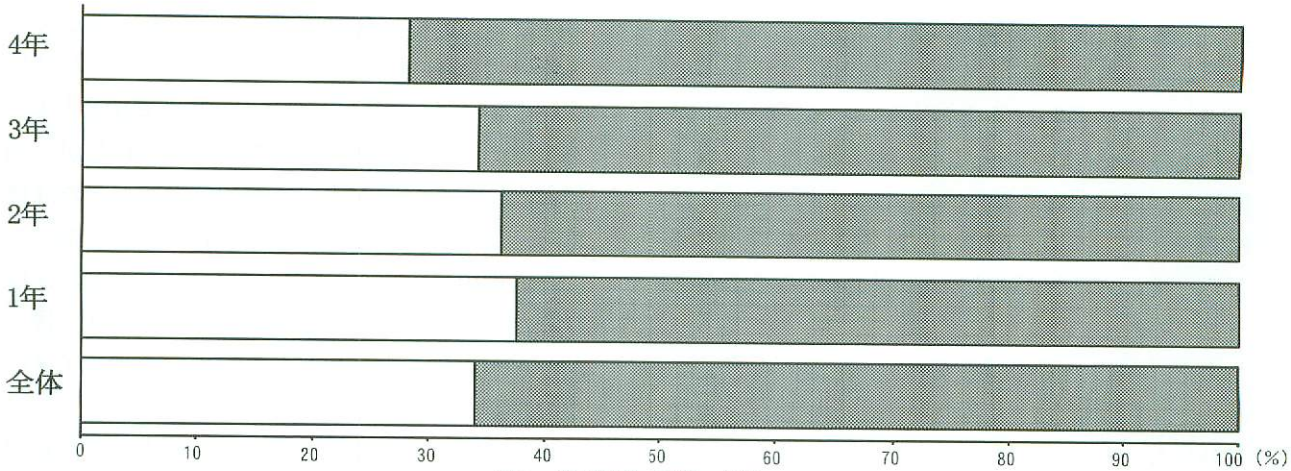

図2a　施設訪問の経験の有無

各学年の有効回答者数は、1年生101名、2年生103名、3年生97名、4年生103名であった。

□ ある　▒ ない

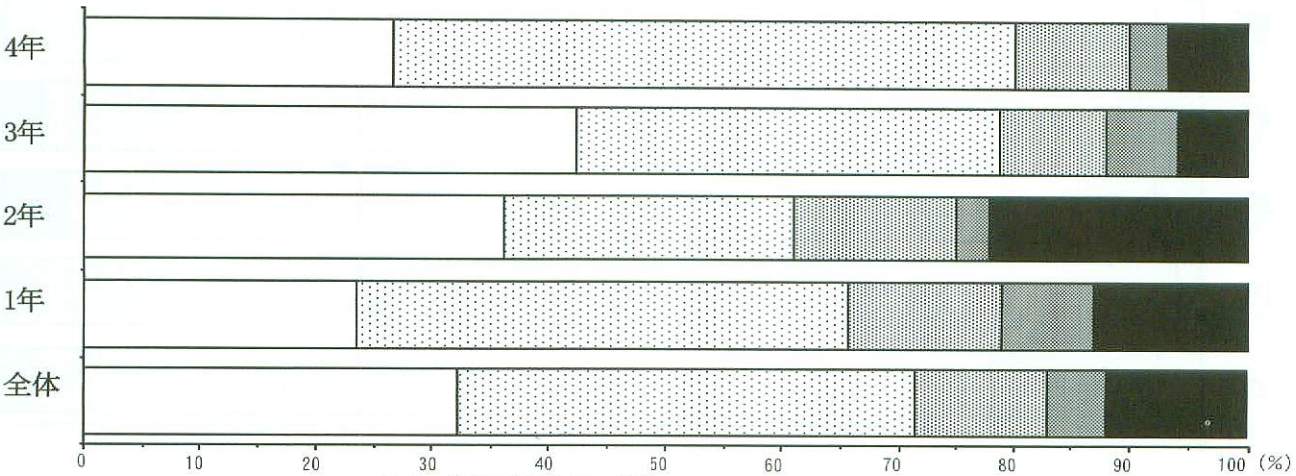

図2b　施設訪問経験者の感想

各学年の有効回答者数は、1年生38名、2年生36名、3年生33名、4年生30名であった。

□ 是非、もう一度訪問したい　▒ 有意義であったが、自らすすんで再度訪問したいとは思わない
▒ 何も感じなかった　▒ 二度と訪れたくなかった　■ その他

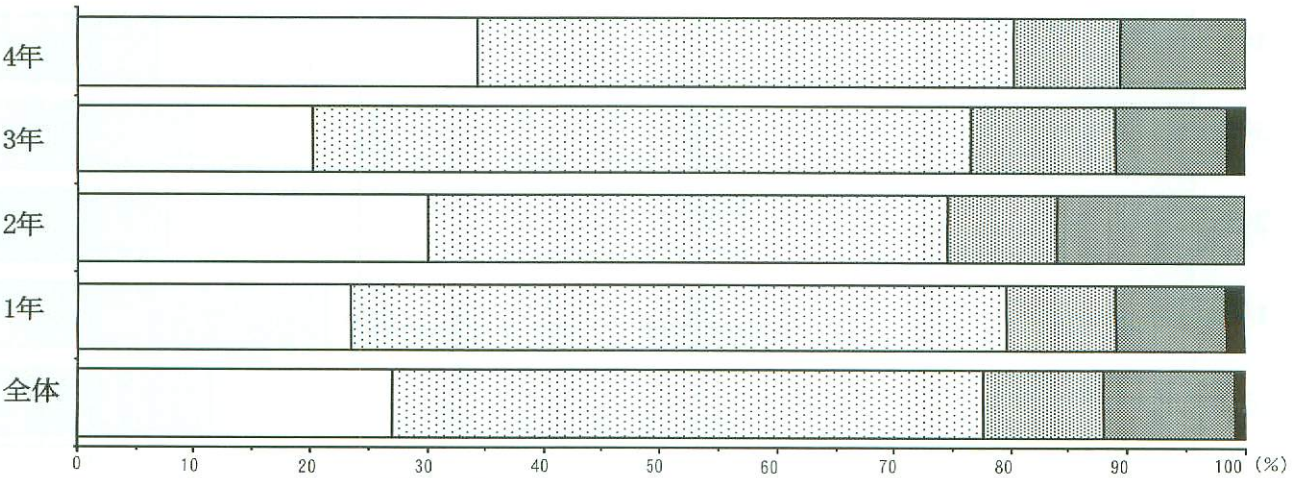

図2c　施設訪問未経験者の訪問希望の有無

各学年の有効回答者数は、1年生64名、2年生63名、3年生64名、4年生76名であった。

□ 是非訪問したい。就職先として検討したい　▒ 授業等で必要があれば訪問したい
▒ どちらでも良い　▒ すすんで訪問したいとは思わない　■ その他

2）高齢者に接した経験について

「高齢者に常に接している（いた）」「時々，接している」を合わせると7割近くの多くの学生が接した経験を有していることがわかった．しかし，接し方や同居の有無等が高齢者に対するイメージに影響していることが考えられることから，どのような接し方をしていたのかを検討する必要があると思われる．

また，接した時の感じでは，「非常に有意義であった」が2割前後，「多少良いことをしたような気分になった」が3割ほどで約半数を占めていたが，一方で「非常に苦痛と感じている」学生も数％みられた．また，今後高齢者と積極的に接していきたいあるいは仕事等で必要があれば接していきたい者は約6割前後あった．反面，できれば接したくないと考えている学生が，特別養護老人ホーム等での実習直前の4年生に6.6％みられたが，高齢者に接した経験が少ないものほど，できれば接したくないと考えている傾向が強かった．接したくない理由に，「接し方がわからない」「会話が成り立たない」「接するのが怖い」等があり，接したことがないことや接したときのマイナスイメージの影響が考えられた．

大谷ら[9]は高齢者のイメージの形成に，高齢者との同居の有無，会話の頻度，その内容，祖父母以外の高齢者との接触，性別，マスコミの影響等

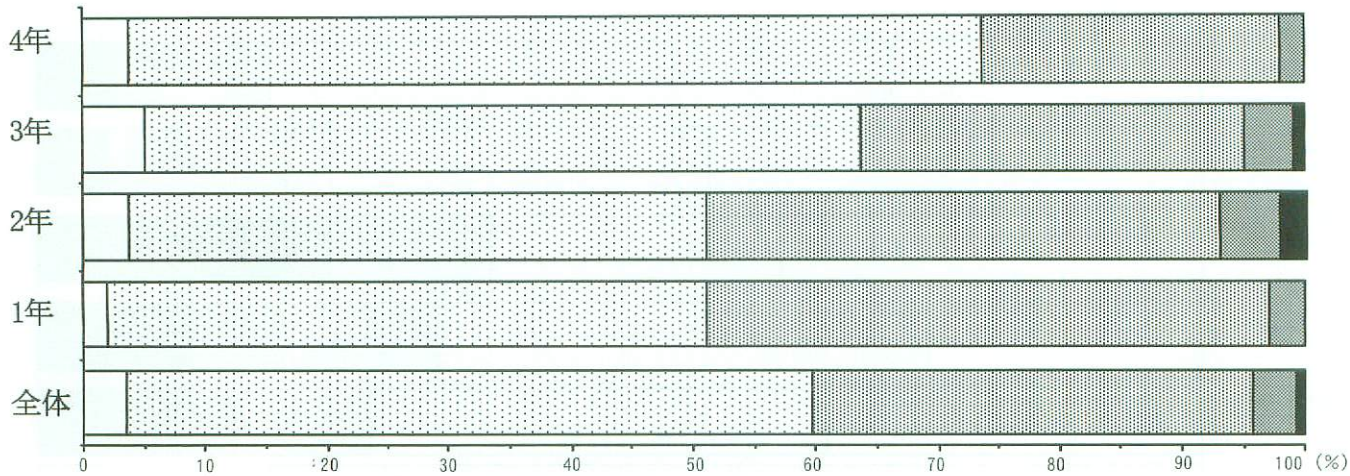

図3a　介護福祉制度の認識

有効回答数は、1年生102名、2年生102名、3年生99名4年生106名であった。

興味があり、詳しくしている　新聞、テレビ等で見た事があり、少しは知っている
名前ぐらい聞いたことがある　全く知らない　その他

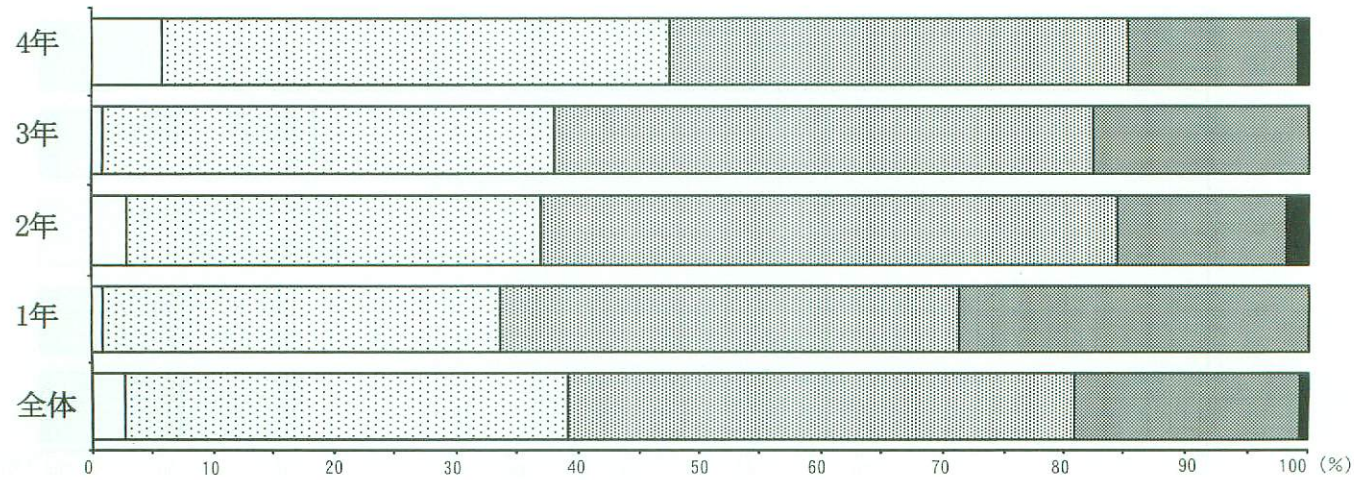

図3b　ケアマネジャーについての認識

各学年の有効回答数は、1年生101名、2年生103名、3年生97名、4年生103名であた。

興味があり、詳しく知っている　新聞、テレビ等で見たことがあり、少しは知っている
名前ぐらいは聞いたことがある　全く知らない　その他

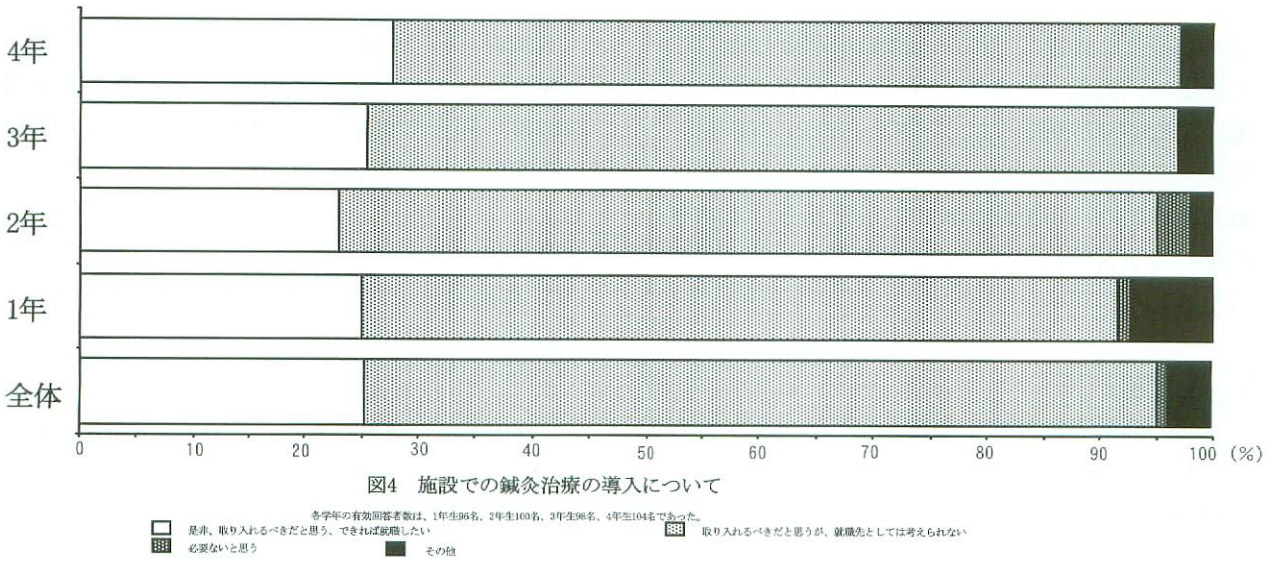

図4　施設での鍼灸治療の導入について

の様々な因子が影響すると報告している．このことから，ただ接していることが重要ではなく，どのように接していくかが重要であり，高齢者の理解を深める事前教育や実習内容の工夫が必要であると考えられた．

3）介護経験・体験について

介護・介助の経験等では痴呆高齢者と接したことのある学生は，3年生は3割弱と少なかったものの，他の学年は4割前後と多く，また，寝たきりの人と接した経験も，1～3年生は約4割，4年生は5割と多く，さらに車椅子を押した経験は約半数が有しており，いずれの経験も予想より多くみられた．

また，食事介助，入浴介助などの「介護・介助体験」を是非あるいは一度ぐらいならしてみたい者は，1，2年生は約6割であったが，臨床教育に臨む3，4年生は7割と多くみられた．しかし，「できることなら行いたくない」と考えている学生も約3割近くおり，意欲を持たせる為の導入教育の重要性を示しているものと考えられる．

4）特別養護老人ホーム等への訪問経験について

施設への訪問経験は，1年～3年までは65％前後経験がなく，4年生では76％がないことがわかった．経験のあるものでも「施設に積極的に訪問したい」学生よりも，「訪問は有意義であったが，すすんでは訪問したくない」や「二度と訪問したくない」者が多かったことや，訪問の未経験者で「是非，訪問したい」と考えているものが少なかったことは，訪問時の印象，高齢者に対するマイナスイメージが影響している可能性があると思われ，受け入れ側の対応も重要であることを示しているものと考えられる．

5）介護福祉制度の認識について

介護保険等の介護福祉制度について詳しく知っている学生はほとんどいないが，少しは知っている学生は約5割以上あり，とくに4年生では7割と高い値を示した．保坂[10]らは一般の大学生の調査結果から高齢者のイメージを規定する要因の一つに高齢者問題への関心があげられることを報告している．今回の結果は，新しく施行されたこの制度への関心が，学年が上がるごとに関心が高いことから，臨床実習や授業での高齢者に接する機会が増えたことにより，高齢者への理解と関心も高まったことを表している．

6）施設での鍼灸治療の導入について

施設での鍼灸治療を，是非取り入れるべき，就職先として考えている学生は少ないが，就職先としては考えられないが，鍼灸を取り入れるべきと考える学生が6割以上あり，合計で9割を越え，しかも高学年ほど高率であったことは，高学年ほど教育を通して鍼灸の理解が深まったことを反映しているものと思われた．

施設での鍼灸治療を行っているところは現在少なく，松本ら[11]の報告では近畿と関東地方の321

施設中わずか46施設14％で鍼灸治療を行っているのみだが，今後導入を検討しようと考えているところが32.3％ある．これから高齢化がより進むことにより，施設での鍼灸治療がより必要になって導入する施設が増えるものと考えられる．従って，施設での高齢者の治療を担当する鍼灸師が求められるようになる可能性が大きいことから，高齢者に関わる実習の必要性がますます高まっていくものと考える．

V. 結　語

学生の高齢者に対する考え方やイメージが教育によりどのように変化するかを検討するための第一段階として，現状を把握するためのアンケート調査を実施した結果，以下のことが分かった．

①高齢者をイメージする年齢は，約9割が60歳以上あるいは70歳以上であった．

②学生の全体的イメージとしては，精神機能および社会的存在のカテゴリーではプラスイメージが強く，身体機能のカテゴリーではマイナスイメージが強い傾向がみられた．

③介護保険制度を詳しく知っている者は1割未満で少なかったが，ある程度知っている者も合わせると5割から7割で，高学年ほど高いことが分かった．介護支援専門員（ケアマネージャー）を知っている者はそれよりも少なかった．

④高齢者と常にあるいは時々接した経験は約7割が有したが，非常に有意義と感じた者は約2割と少なく，また，今後積極的に接したいと考える学生も4割弱と少なかった．

⑤施設訪問経験者は3割強であったが，再度行きたいと考えている学生は3人に1人と少なく，未経験者でも「是非訪問したい」学生は3割弱と少なかったが，「実習等で必要があれば行きたい」と考えている学生は多かった．また，行きたくない理由には，接し方やコミュニケーションの取り方が分からない，高齢者が怖い等のマイナスのイメージが関与しており，高齢者の理解を高める教育の必要性が示唆された．

⑥以上の結果から，高齢者を対象とする実習への導入に当たっては，高齢者の心身の特徴や対応の仕方を理解するための事前の教育や，学習意欲を高めるための意識づけが不可欠であると思われる．

謝 辞

本調査を行うにあたり，ご助言ご協力いただいた明治鍼灸大学大学院東洋医学基礎分野　北出利勝教授，同大学東洋医学基礎教室　篠原昭二教授に深謝いたします．

参考文献

1) 厚生省編：平成12年度版　厚生白書.ぎょうせい，東京,pp6-27,2000.
2) 厚生省編：平成12年度版　厚生白書.ぎょうせい，東京,pp118-149,2000.
3) 朝日新聞：教員免許に義務づけたが介護体験大変.朝日新聞,2000.4.24.
4) 毎日新聞：特報・介護体験：教員免許取得で義務付け学生へ苦情多発．毎日新聞,2001.1.22.
5) 倉鋪桂子，原　祥子：看護学生の高齢者のイメージについて．島根県立看護短期大学紀要，2：9-15,1997.
6) 吉尾千世子：看護学生の老人に対するイメージの変化．順天堂医療短期大学紀要,4：43-49,1993.
7) 梶谷みゆき,倉鋪桂子：看護学生の老人に関する研究.島根県立看護短期大学紀要,5：101-107,2000.
8) 西尾和子,齊藤朋子,福田峰子：医療系学生の専攻分野別老人のイメージ傾向．藤田学園医学会誌，25(2)：9-14,2001.
9) 大谷英子，松木光子：老人のイメージと形成要因に関する調査研究（1）大学生の老人と生活経験の関連.日本看護研究学会雑誌,18(4)：25-37，1995.
10) 保坂久美子,袖井孝子：大学生の老人観.老年社会科学,8:103-115,1986.
11) 松本　勅,高橋則人：高齢者施設における鍼灸治療導入の実態近畿，関東11都府県の施設アンケート.全日本鍼灸学会誌,52(2)：123-130.

A Study on the Images of Elderly People in Oriental-Medical University Students (Part 1)

†MIZUNUMA Kunio[1], TERASAWA Syuuten[3], TAKAHASHI Norihito[2], TURU Hiroyuki[2], MATUMOTO Tadasu[2]

[1] *Department of Basic Oriental Medicine, Meiji University of Oriental Medicine*

[2] *Department of Geriatric Acupuncture and Moxibustion, Meiji University of Oriental Medicine*

[3] *Nursing home Haginosato*

Abstract

Introduction: The environment surrounding elderly people has dramatically changed since the Kaigo Hoken (Insurance for Care and Assistance for the Elderly) System was acted in April 2000. The opportunity for students at our university to care for the elderly through lessons or as volunteers is increasing. However, v arious problems such as physical and mental attitudes in practical care training have been noted. In our university, fourth year students receive practical care training in nursing homes for the aged. Not a few students have reported that their "images of elderly people changed", and "it was easier to care for elderly people than I expected" after practical training. In the present study, the images of elderly people held by university students were surveyed as the first step to investigate changes in the images due to education.

Methods: The subjects in the present study were 470 Fourth year students at Meiji University of Oriental Medicine. The survey was conducted using an original questionnaire. The number of effective respondents was 417.

Results: The age that was considered "elderly" was "60 years or older" and "70 years or older" in approximately 90% of the students. Thirty to forty percents of the students had visited in institution for the elderly, and 40 % had cared for the elderly. General images of elderly people were "obstinate", "physically weak", "on a different wavelength than me", "have good knowledge" and "gentle", which indicated that students in our university had the same images of elderly people as ordinay students.

Conclusions: Even among the students who had cared for elderly people, some took a positive attitude, while others felt awkward when starting the practical training. It might be indispensable for students to increase their understanding of elderly people including mental and physical features, to learn learn methods of communicating with the elderly before the introduction to care training for elderly people.

Received on April 9, 2003 ; Accepted on September 24, 2003

† To whom correspondence should be addressed.
Meiji University of Oriental Medicine, Hiyoshi-cho, Funaigun, Kyoto 629-0392, Japan